

早乙女勝元著

八毛二力工場



未来社

八毛二力工場

未 來 社

ハモニカ工場

定価 一二〇〇円

©著者 早乙女勝元

発行者 西谷能雄

新装版第一刷発行 一九八五年一〇月三十一日

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三―七―二

振替Ⅱ東京七―八七三八五

電話(代表)〇三―八一四―五五二一

ふじ活版・柳京印刷・五十嵐製本

ハモニカ工場

1954年10月1日朝より同月31日夕方までの物語

早乙女勝元

未来社

もくじ

7	6	5	4	3	2	1
一つの衝突	チヨエ	自衛隊	発火金	くろい男	善介	てがみ
	97	77	58	40	27	9

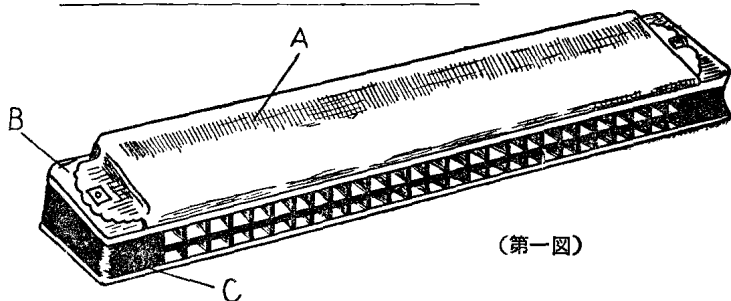
8	くらやみの中	142
9	うたごえ	163
10	下の上の家	188
11	ふられっぱなし	205
12	嵐……	223
13	その日	238
14	素晴らしいもの	260
	『ハモニカ工場』前後	275

カバー・さし絵 下嶋哲朗

ハモニカ工場

——一九五四年十月一日朝より同月三十一日夕方までの物語——

ハモニカ (HARMONICA) の構造



(第一図)

(A) カバー Cover (装飾板)

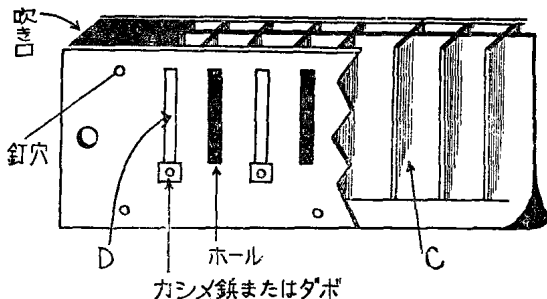
うすいきれいな金属板、たいていは真鍮にメッキをかけたもので、表面には製作所の名称とか、ハモニカの商標などのネームが刻印されてある。装飾のほか、音の響鳴板の役もかねる。

(B) プレート Plate (合金・真鍮板)

カバーよりは厚い真鍮板が使用され、21穴とか23穴とかの種類によって、それだけの(吹口と仕切りと同数の)窓がうち抜かれているが、これをぞくに笛穴(ホール)とよぶ。

(C) ウッド Wood (木部)

穴数だけの溝が楕形にくりぬかれており、材質は楓を第一として、ついで、ブナ、ケヤキなどが使用されている。ウッドの上に小さな釘でプレートが定着される。



(第二図)

(C) 前述のウッドで、プレートに定着されたリードが、吹口から送られた呼吸によって、振動する余地のあるだけ、個々の溝が正確にくりぬかれている。

(D) リード Reed (弁・震動板)

特殊配合の真鍮板で、呼吸によって振動し、発音する。吹いて鳴る音(吹音)のリードは内側に、吸って鳴る音(吸音)は外側に定着されている。低音から高音になるにしたがい、リードの長さは短くなる。このリードの上下にキズをつけることによって、音の高低が微妙に決定されるのである。

1 て が み

——下町。

したまちは、仕事の町であり、貧しいもののふるさである。

そこには、ガタピシと歪んで、今にもよろめき倒れそうな、小さな家と家とが、いくつにもおれまがつた路地に、ささりこむように密集している。今にも倒れそうにみえて、けつこう倒れないのは、満員電車のように隙間がないからだ。まっくろによんだおはぐろどぶは、流れることをしらないまま、この町を自由にのたくって、荒川放水路の方にむかつてゆく。

夕方——くもって、もう、うす暗くなりかけた路地を豆腐屋のラッパの音を通った。

ニシンを焼くにおいや、あたたかな味噌汁のなつかしにおいが、鼻の穴をマツクロにする煤煙とまじり、ゆ

っくりと尾をひくように、ひくい軒から軒をつたわって、やがて下町の空にたたよう。

隅田川をはさんだむこう岸には、くろい工場の屋根のつらなりが、山脈のようにつつき、煙突が何本も、空につきささっているのがみえる。これらの煙突から、いっせいに黒い煙が吐きだされると、朝だ。早番の紙付の音が、水面をはねかえってひびきはじめ、人々が、いっせいにきざわしく町中に動きます。そうして、眠っていた町が、目をさます。くんせいのようにひからびた『オソポロ小学校』にむかつて、吸われるように動いてゆくのは、小さな子供たちの姿である。

ところで、この小学校の、白いコンクリ塀のわきて、もうずっと前から、小さな一台の、ひどく古くさい『市内電車』がエンコしている。そのままいつまでも動きそうにない。が、よくみると、これは動かないのが道理である。車がないのだから。

——八時零分！

うウーッと、川ぶちの紡績工場のサイレンが、冷酷なうなりをあげた。この瞬間から、一日の活動が開始されるのだ。と、同時に、「うわアーン」と何かがいっせい

に、この市内電車の中で、ときの声をあげ、それはサイレンが鳴り終つてもやまず、そのままぶつ通し、夜までがなりたてた。ド・レ・ミ・ファのあらゆる音が、何の音階も調和もなく、めちやくちやにとびだす。まるで、音のかたまりだった。

しかも、この昔の市内電車によく似た奇妙な建物は、片面がでかいガラスでしきられていた。つまり、中で誰が何をしているか、外から一目でわかるといふ具合にできている。いねむりでもしようものなら、外からは、ちやうどテレビでも見ているようなあんばいに、よくうつて見える。これはわがムラタバンド製作所の心臓部、ハモニカの音をつくる作業部屋で、ぞくに『波動室』とよばれている。

この波動室の中をすこし説明するなら、まづ座席は四ツ、四ツとも、小さなガタガタの尻かけ椅子だ。一つ一つが一坪四方にみたない部屋、『公衆電話』のようなせまくるしい部屋で、となりと、となりは、ひどくぶあつな壁で、ピチンとしきられている。自分の音が外にもれないように、外からの余分な雑音が入ってこないように、防音装置がしてあるのだ。外からの音がきこえないの

は、この商売にとってさいわいであるが、「オーイ」と、どなつても、すぐと目の鼻の先にとどかぬというのは、人間様にとっては不幸である。一日中、オシャベリ一つでぎず、唾のように、ただハモニカの音ばかり、きいていなければならないのだ。

石田善介は、はじめてこの工場にきて、はじめてこの市内電車の中の『公衆電話』にとじこめられた時、この世界がまるでハモニカでできているのではないかと、思った。自分たちが何を喋るにしても、それはドレミファ……という、あのハモニカの音でしか、喋れないのではないかとさえ思った。そんなことを、となりの部屋にいる青年にいうと、

「でも、すぐなれちゃいますよ」

と、にっこり笑つていう。笑うと、目がすうとほそくなつて、白い歯なみが、健康そのものをあらわしている。子供ッぽさが、まだぬけきらないが、実にのびのびとして、気持のよい青年だと思った。

「……ひよつと思ふんだ、おれの顔、しまいにハモニカみたいになつてゆくんじゃないかって。ほそくて、つるツとして、キザで鼻もちならなくて。——だって、長

いこと同じ仕事をしていると、いつのまにかそんなような顔になってくるから、おそろしいね。小学校の校長先生なんてのは、カドがとれて、どこの学校でも、みんなおんなじような人ばかりいるし、百姓は、やっぱり百姓みたいだしねえ……」

「ぼくは、いぜん機械工場にいたけど……」
と、この青年はいった。

「見習工で、やっぱり一日中、おなじ一ツの機械にしがみついていたんです。たいした仕事じゃないけれど、目ははなしちゃいけないんだ。自動オクリをかけて、機械が一人でゆっくり動いているのを、朝から晩までみてる。すると、まるでロボットみたい。しまいに、なんだか自分が、自分でないようになり、人間の世界から退化してゆくみたいなんです。心細くなって、おもわずホッペタをつねつてみる……。そんなことじゃ、どこもここもおなじですねえ」

なぞと、親しげな調子で話してくれた。

これが、鈴木正一^{すずき まさいち}だった。善介より半年ほど前に、この工場に入った彼は、今年廿才^{はたち}だという。となりの部屋つまり、第一号室の公衆電話の中に陣どつて、ときどき

部屋がひっくりかえるような声で歌をうたっているのが、まるで遠くの遠くの声のように、二号室の善介にきこえてくることがある。その逆どなりの、三号室には、頭が左にかしいて絶壁^{たて壁}になっている安藤金之助^{やすどう きんのすけ}がいる。島崎雪子の大のファンで、あの情熱的な瞳と、口もとがなんともいえないヨと、そのプロマイドを何枚も壁にはりつけて、口ぐせのようにいう。

ジリジリした西陽の光と熱が、真正面にとびこんできて、部屋の中にかけて温度計の水銀柱が、うなぎのぼりに上る真夏。入ってまもない善介は、製品をもつて、はじめて三号室へいつてみた。せまい部屋の中は、今にも燃え上るかとも思われるのに、びったりと窓をしめきり、金之助は、何かビニールの大包みを頭の上にのせて、顔をしかめていた。そこから、水がたらたらと頬にしたりおちる。なんだろ？ と思つたら、頭の上に氷をのせて、仕事をしているのだつた。しかも、毛むくじやらのコボウのような足を、下のパケツの水の中につっこんで――。

「なんか、においしない？」ときく。

「におい？」

「オレのにおい」

「ああ、君のですか？」

「なかなか、フラッシュだろ？」

これにはおどろいた。どうやら彼は、フレッシュということばを『フラッシュ』だと、思いこんでいるようだ。なるほど写真機のフラッシュは、ぱつと光るかぎりにおいて、新鮮にはちがいあるまい。

どんなに暑くとも、休憩の時にいはいは、けつして窓はあけられないのだ、ということをし、この時から善介は知った。窓をあけると、音が外に散つて、波動がききとりにくく、従つて仕事がいにくくなるからである。しかし、ここで一日中窓をあけずに仕事をしていたら、部屋中が『自分』の空気で、もう、いっぱいに充満してしまう。

自分の空気の匂いはわからぬが、人の部屋のそれは、なんともいへぬカサカサした、枯葉のような男のにおいだった。そのことを、金之助は、『フラッシュ』という独特なことばを借りて、いったのである。

これをきっかけにして、善介はこの愉快な男と話すようになった。金之助は、ある時はひどく茶目で、おもしろいしぐさをして、女工達を笑わせたが、たまに、一人

でじつと石のように、だまりこくつていることが、よくあった。壁の一角所をみつめて、頬杖をつきながら、チリチリと煙草を吸いつづける彼は、はつとするくらいに淋しそうであつた。そういう暗さが、彼のどういうところから出てくるのか、善介には、まるで見当がつかないのである。

しかし、もつとふしぎな人間が、さいごのとつぱじりの四号室にいた。もう三十に近いこの青年は、朝、いったん公衆電話の中に入ると、そのまま終業のベルがなるまで、姿をあらわさなかつた。めつたに便所にもゆかないらしく、昼休みも、その中で弁当をくつて、昼寝をして、けつして外にでず、十二時四〇分、始業のベルが鳴ると同時に、起きなおつて、またハモニカをとる。すこし耳も遠いらしく、挨拶をしても、ほとんど返事をしないばかりか、笑つたこともなかつた。

「あ奴は、げのじょうつていうんだ」

金之助が教えてくれた。

「げのじょう？」

「そうよ、下の上さ」

「なんてすか、それは？」

と、きくと、正一が、そのわけを教えてくれた。ほんとうは横田功^{ヨコタキミ}というが、小学校の時の、通信簿の平均がいつも『下の上』しかもえなかったからだという。気の毒な呼び名をつけたものだと思った。しかし「下の上……」と、口の中でつぶやいてみると、それはひどくユーモラスな余韻^{よゐん}をもつてひびいた。波動部の中では、この工場にもつとも古く、波動工として年期をいれただけあつて、さすがに手ぎわのよい仕事をやってのけた。

善介が、たまにひどい品物にぶつかつて、それを教わりに四号室にゆくと、下の上は、意外に親切にそれを教えてくれた。そんなところから『善さん善さん』といつて、たまには、彼の部屋に「油をうり」にくるようになると、めつたに笑つたことのないこの青年が、年若い正一たちを相手にして、けつこう冗談をとばすようになっていた。

ところで、一日中ハモニカをふいている商売だなどというところ、ひどく楽しげなひびきをもつてきこえるが、じつさいはそんな生やさしいものではないのだ。彼らはただ、ドレミファだけをふいている。きのうも今日も、低

音から順ぐりに、レドファミラソスイド……と、そればかりくりかえしている、という商売なのだ。

複音^{ふくおん}ハモニカのもつ最大の特徴、音色の柔軟さのみなもとなつてゐる音の波動^{はどう}（トレモロといわれる）を、四人は、この硝子で透き通つた市内電車の中で、一手に作つてゆくのである。

右手の指に、ヤスリとノミとキシヤゲ（ノミの一種）をもち、それを五本の指のように、自由自在につかう。目にもとまらぬ勢いで、音をあげさげてゆく。ぶウーとうなる金色の細長い弁^{へん}（震動板）の動きと、音が、四人の全神経の集中してゆくところだ。ド・レ・ミ・ファの、一つ一つの音の基準が、すべて彼らの長い経験をつんだ『耳』だけで、決定される。あのべらべらしたうすい弁の上下を、瞬間的にけずることによつて、音の高低は敏感にきめられるのである。

もつともふだんは、これに波動台をつかう。オルガンに似た機械で、ばたばたと足でペダルをふみながら、空気をだしいれし、その上のハモニカを順次ずらして鳴らすのだが、鳴りの悪いのにぶつかったら、いちいち口でふかないことには、能率はあがらないのである。口は真

鉤くさくなり、冬など、氷の棒を口につきいれられたように、唇がしびれて感覚がなくなってくる。真鍮板の上の埃で、唇が道化師のようにくろくぬりつぶされてしまう。

楽器屋の店頭の最前列をかざる人誰でも知ってる日本一の名器 ヴムラタバンドは、夏でも冬でも、こうして一本のこらず、この市内電車の中を通過してゆくのだ。

今、突然三号室の窓が、がらっと音をたてて、大きくひらいた。中から、金之助の顔が、日向の猫のように、目をほそくして、外にあらわれる。やがて、彼は上半身を窓にのりだした。そのひろい胸に、秋の陽がいつぱいにはねかえっている。

「おうーいッ」

それで、二号室の窓が、またすつとひらく。

「なんだい、金之助氏」と、これは善介だ。

「――きのうの給料さ」

「おッ、ありや、ちよつとひどすぎるなア、べらべらじやねえか」

「てんで、くさつちゃうよ」

いつのまにか、反対がわから正一が首をだして、善介のいうより先に、つの口している。ひと仕事が終わったと

思うころ、誰がというのではなしに、みんなは、いいあわせたように、仕事の手を休めて一息ついた。が、困ったことに、みんないつせいに一息つくと、ハモニカの音がまったくきこえなくなるから、事務所の方からは、すぐにそれとわかつてしまう。だから、品物の一本を波動台の上ののせて、ダベリながらも、軽くペダルをふんていなければならぬのだ。

「いくらへった？」

ユキユキとふみながら、善介がきいた。

「大枚四百卅円！」

「なんと、俺なんざア六百円だぞ。いいツラの皮だい！いいかげん、コレんなっちゃうよ、なあ……」

金之助は、左手の指で頭の上に丸をかき、クルクルパ―をやってみせた。――この夏場をこしていご、ハモニカの売れゆきがエアポケットのようにおちたのだ、と社長はいうが、じつさい、先月はひどい賃下げになっていた。ハモニカ界の巨匠村田西峰先生特製のムラタバンドでさえ（といって、彼らはこの大先生を、写真がいかに一度もみたことはなかったが）真正面から、不景気のおおりをくらった。